学校教育実践学研究，1996，第2巻，69－75頁

高校英語教科書オーラル・コミュニケーションBの分析

深 澤 清 治・上 西 幸 治*

（1995年11月17日受理）

An Analysis of Senior High School English Textbook Oral-Communication B : How Communicative Are Oral Communication Textbooks?

Seiji FUKAZAWA and Koji UENISHI

Abstract: The purpose of the present article is to analyze the communicativeness of English Oral Communication B textbooks currently used in senior high schools in Japan. As part of the present Course of Study, the Ministry of Education introduced a new kind of course, Oral Communication A, B, and C and the actual instructions began in the classroom in 1994. In line with the recent communicative trend, there has been a growing expectation of dramatic changes in the teaching of oral English. There has been a great deal of discussion on the effective techniques for using textbooks and supplementary materials; however, relatively less attention has been focused on Oral Communication textbooks. They have been used without much critical analysis. Very little research has been carried out to day on how communicative those textbooks actually are. The present analyzed the dyad or sometimes triad interactions found in the Oral Communication B textbook and classified them into three categories: formulaic, information-exchange, and pragmatic. Based on the findings, some suggestions are made concerning possible improvements in the design and use of senior high school textbooks.

1．はじめに

平成6年度より現行の学習指導要領の下で，新しい英語教育への変革を目指してオーラルコミュニケーションA，B，Cが導入された。ティーム・ティーチングの導入と同様に英語の4技能のうち，特にオーラル面での進展が期待され，英語教育全体がコミュニーケーションを志向する中で，様々な指導や評価の取り組みが発表されている。しかしながら，指導方法への関心の高さに比較して，使用されている教材の比較分析や改善点の指摘は十分に行われていないように思われる。新しいタイプの授業を模索する中で，教材が果たすべき役割は重要なものであり，特にコミュニーケーションを掲げる教材がどのくらいコミュニカティブかを計ることは今後のオーラルコミュニケーション授業へ示唆を与えうるものであろう。本研究の目的は，平成6年度発行の高校英語教科書オーラルコミュニケーションBのうちから1種類を選び，その対話について3つの観点から分類し，その特徴についての分析・考察を行うことである。

2．研究の背景

(1)現行オーラル・コミュニケーション教科書に関する先行研究

高等学校英語オーラル・コミュニケーションBの検定教科書は現在，17社20冊が出版されている。それぞれの教科書にはその形式・題材内容におい

*広島県立賀茂北高等学校

て著者の工夫が見られるが，全体的にはかなりの教科書に類似したトピックが扱われている。たとえば，目次を参考に教科書に含まれている題材を分類していくと，10冊以上の教科書に扱われている一般的な話題には次のようなものがある。

挨拶・自己紹介，飛行機・空港，電話，天気・天候，買い物，外国の都市，環境問題，地図・道案内・位置関係，スポーツ，旅行，料理，テレビ・ラジオなどのニュース

また，教科書のスクリプトをオーラル・コミュニケーションのための発想別の視点から分類を行った試みもある。たとえば，三村（1995）では次のような詳細な発想別表現データベースをまとめている（部分）。

会話のストラテジー

1）日常の挨拶

Good morning. Good afternoon. [AE]

2）紹介をする

Let me introduce myself. My name's Kenta Sasaki. [HT]

3）呼びかける／話を切り出す

Excuse me. Can you tell me how to get to the office? [E]

4）不明な点を聞き返す

What does Mitsuo mean – It means "bright boy." [HT]

5）間をつなぐ

Where were we on Friday afternoon? — Let me see. [E]

6）相手についての情報を得る

May I have your name and phone number, please? — Yes. My name is Asher, 358-1116. [HT]

7）相手の状態を気づかう

What happened to your leg? — I was playing soccer, and a player on the other team ran into me. [S]

8）相手の好み・関心を尋ねる

What kind of music are you interested in? — I like rock music a lot. [HT]

9）相手の言うことを認めながら反論する

Do you like folk music? — It's all right, but I like pop music. [I]

会話の場面・話題

1）学校生活について

How many classes are you taking? — Five. [HT]

2）買い物での会話

May I help you? — Yes, please. I'm looking for a jacket. [HT]

3）レストランで

Are you ready to order now? — Yes, I'll have the sirloin steak with a tossed salad, please. [AE]

4）天候のことを話す

It's cold day, isn't it?

5）交通事情・手段

Say, how do we get there, Kumi? — By train from Tokyo Station. [HT]

6）道を尋ねる／案内する

Can you tell me the way to Takeshita Dori Street? — Go straight along this street until you come to a big street. Then turn left. [HT]

7）電話のやりとり

Hello. May I speak to Keiko? — Speaking. [HT]

機能・発想別の会話表現

1）命令する

Be quiet and study hard. [Ex]

2）提案・勧誘する／受諾する・しない

I'd like to propose flying a hot-air balloon. — That sounds terrific. [HT]

3）許可を求める

Is it OK to watch TV on this bed? — No way. [AE]

4）同意する

Do most students take trains to school? — I think so. [S]

5）意見を求める／意見を述べる

What do you think of Japanese professional baseball? — I think some Japanese players

are as good as American major leaguers. [M]

6）予定・意図・計画を表す

Are you doing anything on Sunday? — No, nothing in particular. [L]

7）欲求・願望を表す

What kind of food would you like to have? — Well, I'd like to eat Mexican food. [HT]

8）義務／必要を表す

You're supposed to change your shoes when you enter the school bundling. [I]

9）依頼する／承諾する・しない

Can you give me some advice? [I]

10) 推量する

It can't be time to get up. It's still dark! [E]

11) 祝福する／励ます

I'm happy to hear that. [I]

12) 同情する

Congratulations on your winning the first prize! [AE]

13) 賞賛する

You look nice in your school uniform. [S]

14) 感謝する

Thanks a lot.— You're welcome. [Ex]

15) 謝罪する

I must apologize. I'm afraid I lost your cassette. — That's OK. [S]

16) 驚きを表す

You must be joking! [S]

(2) 目標としてのオーラルコミュニケーション

学習指導要領によれば高等学校外国語科の目標としてオーラルコミュニケーションでは聞くこと及び話すことの言語活動の指導を重点的に行うことを目指しており，そのうち内容の取扱いに関しては次のように示されている。

「感想，感情などを表す効果的な表現を指導するよう配慮する」（オーラルコミュニケーションA）

「聞き取った内容についての確認や賛否などを表す効果的な表現を指導するよう配慮する」（オーラルコミュニケーションB）

「提案，主張，論証などを表す効果的な表現を指導するよう配慮する」（オーラルコミュニケーションC）

これらはいずれも発想別表現の取り扱いを指示している。

目標としてのオーラルコミュニケーションにおいては，言語活動を支える音声下位技能の伸長だけでなく，幅広い場面・状況，人間関係におけるコミュニケーション能力を養成することが求められている。オーラルコミュニケーションの教科書研究においては，これまでの研究では教科書間において題材の扱う範囲や発想・機能別分類が行われている。これに加えて，一つの教科書内でどのような種類のオーラルコミュニケーション活動が可能なのかを分析・調査する必要がある。コミュニケーションの観点から見れば，挨拶のような定型表現や，感情移入を伴わない客観的情報の交換，及び感想・感情の伴った対話とはそれぞれコミュニケーション上，異なった役割を持つものと言えよう。以下においては，教科書が扱うオーラルコミュニケーションの範囲についての調査・分析を行うことにする。

3．調　査

(1)目　的

本研究においてはオーラルコミュニケーションB教科書中の会話の特徴を3つの観点から分析して，コミュニケーション志向の授業にどのように役立つかを分析・検討する。

(2)分析材料

現在使われている高等学校英語教科書オーラルコミュニケーションBのスクリプトに出ている対話を分析材料にする。

(3)分析観点とその方法

分析に先立ち，分析尺度として対話において交わされる情報の種類や聞き手の反応の質から以下の3つの観点を設定した。また，それぞれの観点において具体的には以下のような例があげられる。

(1) Formulaic Interaction（挨拶のような定型表現）

A: Hi! How are you doing?

B: All right. How about you?

A: I'm feeling a little bit sleepy.
B: So am I.

(2)Information-exchange Interaction（感情移入を伴わない客観的情報の交換）

A: Tell me a little about your hometown.
B: It's an industry city. Not very large.
A: What's the population?
B: The population's about 120,000 now.

(3)Functional (Pragmatic) Interaction（依頼・勧誘など人間関係機能の伴った対話）

A: Would you translate this notice for me? It's in Japanese.
B: Certainly. It says, "The Library Will Be Closed Next Monday."
A: That's good to know. Thank you for your help.

これらの観点をもとに次の2種類の調査を行った。

(a)情報の種類や反応の質に応じて，上の3つのカテゴリー別に出現頻度を調査する。

(b)依頼・勧誘機能に対する肯定・否定的応答の相対的頻度を調査する。

4．結果と考察

(1)分析カテゴリー別出現頻度調査結果

前節で述べたformulaic, information-exchange, functionalの3つの観点をもとに，分析教科書に表れた対話を一単位として分類した結果は次の通りである。（実際の対話例についてはAppendix参照）

(a)カテゴリー別出現頻度調査

まず，カテゴリー分析が示すように，information-exchange interactionが非常に多い（全体の65%）ことがわかる。情報交換というのは話し手・聞き手相互の情報差を埋めるコミュニケーション活動として扱いやすい教材であるが，単に「時間・時期を尋ねる」,「大きさを尋ねる」のみでは事実情報の交換に留まり生徒の心情に迫るinteractionとはなりにくい。それに対して，functional interactionであれば，「相手の気持ちをくむ」,「自分の気持ちを伝える」活動により，学習者の心情に迫る教材として扱えるので，対話がより生き生きとしたものになり，コミュニケーション活動も活発になるといえる。残念ながら，この教科書ではfunctional interactionはわずか20%を占めるにとどまっている。対話の導入として事実情報のやりとりから始まることは自然であるが，それに終始するのではなく，何らかの人間関係を通した感情・思考の伴うやりとりへと発展することが望まれる。

また，挨拶などの定型表現の割合は8%に抑えられている。基本的な日常会話表現は中学校レベルおよびオーラルコミュニケーションAでかなりの部分が提示されており，オーラルコミュニケーションの教科書の目指す方向が明確に示されていると言えよう。

(b)依頼・勧誘機能に対する肯定・否定的応答の相対的頻度

次に，分析した対話中の人間関係機能に関わるfunctional (pragmatic) interactionの中から依頼，勧誘の2つの機能を表すと思われる対話について，肯定・否定的応答の相対的頻度を調査した。これは異文化コミュニケーションにおいて「相手の申し出を断る」という言語行為は困難な場面が多く，たとえば「相手の発言を訂正する」,「反論を述べ

表1　英語教科書オーラルコミュニケーションBに表れた観点別分類

分析カテゴリー	頻度	%
①formulaic interaction	8	11.8
②information−exchange interaction	46	67.6
③functional(pragmatic) interaction	14	20.6
	68	100

る」というようないわゆるface threatening actsをいかに相手の気分を害さずに行うかに文化の差が表れるため，こうした場面や状況を提示することがオーラルコミュニケーションの指導において重要と考えられるからである。1種類のオーラルコミュニケーションBの教科書から当該機能表現とそれに対する応答を抽出した結果は次の通りである。

表2　依頼・勧誘機能に対する肯定・否定的応答の出現頻度

	肯定応答	否定応答
依頼	6	0
提案	2	0
勧誘	2	1
	10	1

表2の示すとおり，教科書中に提示された応答例は否定的応答がわずか1例しかなく，相手からの依頼・勧誘に対して'yes'と応答する練習が大半を占めるのはコミュニケーション活動としては不自然であろう。このような対話例を学習のモデルとした場合に，常に相手からの依頼・勧誘・要求に対して受諾する態度を持った学習者を育成する可能性もある。依頼・勧誘に対して受諾・承諾しない，あるいは反対できる学習者を育てるためにも否定的応答をしかたを教材の中にモデルとして提示する必要がある。確かに'Yes'と答えて会話を発展させるのは，対話練習では会話の進展性もあり有効と考えうるが，実際の場面等を想定した教材内容にするためには，いつも肯定的応答ばかりを学習していたのでは学習者の幅広い学習活動にはつながりにくい。すなわち，依頼等をされた人が'No'を言いたい時には人間関係を考慮した上でどのように具体的に表現するのか，その表現方法を習得する必要がある。これがまさしくfunctional interactionであろう。教師は教科書を使ってそのような表現を提示しながら，実際の場面を想定して生徒にモデルを示したり対話練習させたりすることが可能であり，教科書の持つ意味は非常に大きくなる。

本研究の対象以外のオーラルコミュニケーションの英語教科書においては「提案・勧誘」という言語機能を表す対話に限ってその中に見られる否定的応答を取り出すと，15例のうち次のような5例が見られた。

Would you like to come along? — I'd like to, but I'm too busy. [HT]
Would you like to join us? — I'm sorry I can't. [S]
Let's go out. — No, let's not. It's getting dark. [E]
Shall I take you back? — No, thanks. [I]
Would you like some lobster salad? — Not for me, thank you. I'm a vegetarian. [E]

換言すれば，その他の対話はすべて肯定的反応及び無反応を含むものであり，肯定的反応への偏りは，他のオーラルコミュニケーションの高校英語教科書にも共通する傾向と言うことができる。人間関係における感情や意思表示を含むfunctional interactionの提示は，肯定的及び否定的表現のバランスを考慮しながら，生徒の幅広い学習活動さらにはコミュニケーションに役立てることが肝要であろう。

5．オーラルコミュニケーション教科書改善の方向

これまでの調査・分析結果をもとに，次に具体的に教材改善の方向として何が考えられるか検討してみたい。第1に，オーラルコミュニケーションの教科書中に何らかの形で場面設定の提示をすべきである。分析を行った教科書においては会話の場面や状況が不明瞭なものが多く，対話を文字化するに留まっている箇所が多い。確かに登場人物を明確に'nurse'や'waiter'などで解りやすくしていたり，会話の話題が多岐に富んでいるため，学習者に様々な例を提示する意味はあるといえるが，1つ1つの会話の場面や状況が明確に示されていないため，生徒には理解しがたい場面設定となっている。その点を克服するためには，教科書中の対話の前に場面や状況を明示するか，あるいはそのヒントになる材料を提示することが必要で

あろう。場面設定のない会話は生きた会話にはなりにくく，場面・状況を大切にした教科書作りをしないと文字言語の音声化のような表面上だけの会話（発音）練習に近い指導に陥りかねない。さらに状況づくりを教師に頼ることは教師にとって負担の大きい教科書となる。教科書を使って生徒に提示された言語材料に興味を持たせ，言語習得の動機付けとなりうる教材開発のためにも，この様な努力は不可欠であろう。

第2には，生徒が発展的会話を形成できるような配慮をすべきである。分析教科書においては，基本的にAとBの2回ずつ会話を行う4行対話のかたまり(chunk)で構成されており，パターン化されてしまって発展性がない。そのパターン化した会話を発展させるためには，その延長の会話の指導が必要である。発展的会話を生徒に行うようにさせるためには，4行の基本会話のあとに様々な形の練習を盛り込むとよいのではなかろうか。また，生徒自身にその会話の中身（whatの部分）を意識させ，自分で考えさせ，オリジナルなものを求めてさせていくのも1つの方策と言える。確かに発展的会話練習を教科書の中に明示するか否かは教科書作成者の裁量ではあるが，多くのオーラルコミュニケーション教科書中のダイアログを見る限り発展的会話になっているとは言いがたい。基本モデルに加えて，より高次目標としてのモデルを提示することも教材の重要な役割であろう。

最後に，オーラルコミュニケーション教科書使用上の留意点について考えたい。上で述べた教材改善の視点はそのまま教科書使用上の留意点となる。まずは対話における場面，状況，人間関係などを指導上，明確にする必要がある。学習指導には大きく分けて教師中心型（teacher-centered teaching）と学習者中心型（learner-centered teaching）が考えられるが，分析した教科書の場合，コンテクストを教師の側から補足する必要があるため教師中心のアプローチの方が使いやすい教科書といえる。

たとえば，唯一勧誘の否定的応答表現のカテゴリーに入っている会話を取り上げてみよう。

A: The ads says that the sale ends on Sunday.

B: Then let's go over there. It looks like a good sale.

A: I have no money at all.

B: So? It won't cost anything to look.

学習者に対して，この対話を使ってBがAの誘いを断っているのかどうか（Yes or No）の問いを投げかけるような工夫も考えられる。しかし，その際に重要なのはどのような状況や人間関係でこの会話がなされているかを把握させることである。やや上位の学習者であれば次のようなこともできよう。まず，生徒に「AとBはどんな人間関係にあるのだろう」と問いかけ，この時，グループワーク等を利用して考えさせ，発表させるのである。その時，必ず生徒にその理由を求めることが大切である。生徒自身の考えを明確に論理立てるためである。上記の例で記述すると，このBの“Then let's go over there.”という勧誘に対して，Aは“I have no money at all.”と応答しているため，Bが少なくともAよりも関係上，上の立場であることは考えられない。高い地位の人から勧誘されて何か断りの言葉もなしに，いきなり「お金が全然ないんだ」と言うことは考えにくいからである。全体の会話を考慮すれば，AとBの関係は対等に近い関係，たとえば友人関係等がありうるといえる。これはあくまで一例であるが，会話を場面・状況を大切にしながら授業を展開していくことの必要性を認識させうる。

オーラルコミュニケーションの授業の中で，学習者が積極的にコミュニカティヴな活動を行い，彼等にその場に応じたコミュニケーション能力を身につけさせるためにも，実際に教師が使用する教科書は適切なインプットモデルとしてだけでなく，幅広い活動の機会を提供することを保証しうるもの，即ち教師の扱いやすい教科書（teacher-friendly textbooks）でなければならない。

6．終わりに

本研究においては，オーラルコミュニケーションBの高校英語教科書分析対象として，その中に含まれるひとまとまりの対話をコミュニケーションのタイプにより3種類に分類し，その頻度調査を行った。さらに「依頼・勧誘」という機能に対する反応の種類についても頻度調査を進め，その結果，事実情報の交換という機能を中心とした教科書の特徴を浮かび上がらせることができた。

今回の分析対象はオーラルコミュニケーションBの教科書であり，分析対象も非常に限定されたものであった。今後，さらに他のオーラルコミュニケーションの教科書について分析を進めることによって教材開発の改善を図り，オーラルコミュニケーション指導上の可能性を調査していくことが必要であろう。

分析教科書

今回，分析したのは次のオーラルコミュニケーション高校英語教科書である。

[HT] *Hello, there!*（東京書籍）
[I] *Interact*.（桐原書店）
[S] *Sailing*.（啓林館）
[E] *Evergreen*.（第一学習社）
[AE] *Active English*.（一橋出版）
[Ex] *Expressways*.（開隆堂）
[M] *Mainstream*.（増進堂）
[L] *Laurel*.（三省堂）

【参考文献】

三上　浩一(1995)「『発想別表現』データベース」『オーラルコミュニケーションのためのデータバンク』(『英語教育』別冊，大修館書店）.

Appendix

分析教科書に表れた対話は次のようなものである（部分)。

(1) Formulaic Interaction

A: Good morning. How are you?
B: Fine, thank you.

A: Hi! How're you doing?
B: All right. How about you?
A: I'm feeling a little bit sleepy.
B: So am I.

(2)Information-exchange Interaction

A: Is it very far from here to Shinjuku?
B: No, not very far. It's about a ten-minute walk.
A: Thank you.
A: It was cold at night, wasn't it?
B: Much colder than we expected! But it got warm during the day.

(3)Functional (Pragmatic) Interaction

A: Excuse me. Could you do me a favor?
B: OK. What is it?
A: I'd like to borrow your dictionary until 4 th period.
B: Sure. I won't need it today.

A: Can you tell me how to get to the Principal's office?
B: Certainly. It's on the second floor, Room 232.
A: Will he be there now?
B: He's been here from 1 p.m. Would you like to wait in the Reception Room?